

## いま聞きたい

今年度末で退任 いまの思いは

## やれることと全部やった

先月、オーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）の音楽監督を今年度末で退任することが発表された井上道義さん（70）。OEK創設者で初代音楽監督の故・岩城宏之氏の後任として就任して10年半、いまの思いは。

OEK音楽監督

井上 道義さん（70）

——音楽監督として10年半、振り返ってどうですか

創設2年目ごろに初めて来たときは人数も少なく、岩城さんに「なんでこんなオーケストラつくったんですか」と。2年したら変わるからまた来い」と言うので行ったら、本当に変わっていた。外

国人が多く文化がぶつかり合っていて、その場で意見を言ってくる初めてのオケでした。

OEKは金沢のためではなく、金沢から日本や世界へ発信するためにつくられたオケ。そういう岩城さんの思想に賛同できたから来た。金沢21世紀美術館や邦楽、ダンス

とのコラボレーション、ヨーロッパへのツアー。2015年には金沢発のオペラ「フィガロの結婚」を全国的に展開した。やれることは全部やり尽くしたと思ってる。

——08年に始めたラ・フォル・ジュルネ金沢が昨年で終了。背景に企画制作してきた井上さんの所属音楽事務所と実行委との軋轢があったとも。退任に影響は

一番の原因かな。芸術監督のルネ・マルタンはたとえ客が入らなくても、新しい視点で「アート」をやるつもりでいた。一方、金沢の実行委は皆が知っている曲で、無料コンサートを増やして裾野を広げようという考え。僕はラ・フォル・ジュルネをやるならマルタンのやりたいように、でなければ別のこと

をやろうと言ってきたんです。

10年につくったOEK5ヵ年計画では、ラ・フォル・ジュルネの次を早く考えようと書いた。音楽だけじゃなく舞や絵画、彫刻、映像、ゲーム音楽もある芸術祭をやりたいなど。それが14年、具体的に考えなきゃいけないときに僕が咽頭がんになってパワーがなくなり、頓挫しちゃった。それが非常に残念。

——2代目として、プレッシャーは感じましたか

放っておくと、OEKが岩城さんの考えた国際的なオケじゃなくなっていくのが嫌だった。海外公演に必要な現地とのコネクションは弱まっている。ただ、岩城さんのときより間違いなく、OEKは全国区になった。海外でもずいぶん知られています。外国のオケで例えると、スコットランド室内管弦楽団やパリ室内管弦楽団かな。

——次の音楽監督に期待することは

OEKのスタイルを続けたいける指揮者がいい。常に進化して目の前のお客さんが喜ぶ演奏をする、老舗のライムン屋ではなく百貨店みたいなオケ。それも嫌々じゃない。客の少ない日も学校公演も、本番では彼ら、必ずハッピーなんだ。

——今年3月で大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者も退任。今後のオケから声がかかったら

やりたくない。やりたいことは全部やっちゃった。音楽監督である自分は僕にとってもそんなに重要じゃない。指揮者ですら。7月に大阪フィルハーモニー「ミサ」の指揮者・演出・指揮をしたように、指揮するのは音楽を聴くことだけじゃない。

父の人生を描いたオペラを作曲中です。父は関西の出身で、歴史に翻弄されてきた。自分のくらしで来たかな。早く書きたい。今も、こうやって話している場合じゃないです。

（田中あられ）



いのうえ・みちよし 1946年、東京生まれ。ニューシーランド国立交響楽団首席客演指揮者、新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督、京都市交響楽団音楽監督兼常任指揮者などを歴任。2007年1月からOEK音楽監督。

わたって暗殺した。同市小一 交通機関にも遅れや遅れ一内16カ所の投票所で、午後 いるが、最も上の「時勢は